



Richard Dawkins : The Selfish Gene

Oxford University Press (1976)

Richard Dawkins は「利己的な遺伝子」という考え方を提唱した。彼は本書で次のように述べている。

「彼ら（＝遺伝子）はあなたの中にも私の中にもいる。彼らはわれわれを、体と心を生みだした。そして彼らの維持ということこそ、われわれの存在の最終的論拠なのだ。かれらはかの自己複製子として長い道のりを歩んできた。今や彼らは遺伝子という名で歩き続けている。そしてわれわれは彼らの生存機械なのである（2章）」

遺伝子は、繁殖に成功し、なるべく多くの子孫を残すために巧みに振る舞っている。遺伝子にとって重要なのは、自分のコピーが子孫のなかに増えていくことである。オスたちがなわばりやメスをめぐって激しく闘うのも、メスの動物の涙ぐましい母性愛も、実は遺伝子のなせる技である。遺伝子にとっては、自分が宿っている個体の子供を産んで育てあげてくれさえすれば、その後この親がいつまでも生き延びていく必要はない。そこでガンの遺伝子のように、個体が成長し子供を産みガン遺伝子が子供に伝わってから初めて発現するという遺伝子もある。その発現により個体は死ぬが遺伝子のコピーは確実に伝わっている。このように考えると、我々は自分の体に宿っている遺伝子を生き残らせるために生きている、遺伝子生存のための機械（vehicle＝乗り物、媒介）ということになる。

この考え方によって多くの生命現象や複雑系現象に説明がつけられる。たとえば、遺伝的プログラミングにおけるプロト現象も「利己的な遺伝子」の立場からイントロンの成長による解釈が可能である。

しかしながら、「利己的な遺伝子」というフレーズはその表面的な理解のみで流布し、本来の意味がしばしば曲解されている。たとえば、遺伝子自体が合目的に振る舞い、結果としてその媒体である（人間を含めた）生物もそれに従って行動するという主張がある。遺伝子が利己的であることを認めるとしても、それは選択の影響として残される結果であり、決して目的に従って振る舞ってい

るのではない。さらには、人間の高次の心理学的行動を「利己的遺伝子」のなせる業として科学的な根拠や証明なしに解釈する説もある。

N. Eldredge と S. J. Gould は、「利己的遺伝子」の考えが実際の進化現象に合わず、さらに遺伝子至上主義や進歩的進化¹⁾につながると批判している。利己的遺伝子の信奉者をウルトラ・ダーウィニスト（進化の説明に遺伝子を中心においた還元主義者）と呼ぶのに対して、彼らは自らをナチュラリスト（生物学的なシステムの階層構造により注目する人々）と称している²⁾。よく間違えられることだが、進化は進歩（＝最適化）ではない。目指すのは最適性ではなくて頑強性である。また Gould は「**のための遺伝子」というものは存在しないとも指摘した。体は個々の遺伝子がそれぞれつくりあげるような、多数の部分に分解できるものではない。そのため利己性が働くような実体がそもそも架空の産物だと批判する（ただしこれには Dawkins 自身が第2版の注釈で反論を展開している）。

Dawkins はその後も、「ミーム」（文化的情報の複製子）や「拡張された表現型」（寄生者による宿主の操作、ビーバーが作るダム、シロアリの塚なども遺伝子の表現型だと見なす）などの画期的アイディア・挑戦的な発言を繰り返し、数多くの論争を引き起こしている。

久しぶりに本書を読み返してみても、Dawkins 自身が次のように述べているのを見い出して興味深かった。

「表現を神秘的に解釈されてはこまる。目的の概念はいずれにおいても単なる比喩にすぎないのだ（11章）」

これは、深い議論をせず皮相な理解ですませてしまう昨今の傾向への予言的警告とも思われる。

参考文献

- 1) リチャード・ドーキンス：悪魔に仕える牧師，早川書房（2004）。
- 2) ナイルズ・エルドリッジ：ウルトラ・ダーウィニストたちへー古生物学者から見た進化論，シュブリンガー・フェアラーク東京（1998）。

（平成17年6月3日受付）